

最終報告書レポート（短期）

タイトル. 「グローバル・ベイビー・ファクトリーⅡ」創作のためのリサーチとネットワーク構築

1. 活動概要

私は、2015年4月5日～6月1日までの約2ヶ月間、国際交流基金アジアセンターのアジア・フェローシップを受け、タイのバンコクとチェンマイに滞在した。自作「グローバル・ベイビー・ファクトリー2」の執筆のため、2014年8月に発覚した、日本人資産家タイ代理出産事件を取材すること。及び、タイの現代演劇の現状（創作の状況や劇場と観客の嗜好）を調査することが、主な目的であった。

まず、日本人資産家タイ代理出産事件の取材だが、これは思うように進まなかった。代理出産のクリニックを何件か訪ねたが、インタビューには対応してもらえなかった。また、逃亡中の事件の当事者に会えるはずもなかった。しかし、事件が発覚したマンションを見学することはでき、また、知人から紹介してもらったNHKのバンコク支局の方に当時の話を聞くことができたので、それについて報告したいと思う。

次に、タイの現代演劇についてのリサーチだが、9組のタイの現代演劇のアーティスト・プロデューサーへインタビューすることができた。当初は、タイの社会派演劇、ドキュメンタリー演劇の現状について、知りたいと考えていたが、タイの演劇状況は、日本や東京のそれとは大きく異なる文脈を持っていることがすぐにわかり、主要な演劇人、それもできるだけ劇場を運営に関わっている人物にインタビューをするというように方針を変更した。というのは、バンコクには、現代演劇の小劇場は10軒ほどしかなく、滞在中に量の面から言えば、さほど芝居を見られなかったからだ。

その点で言えば、今回のタイ滞在は、一つの町に130以上もの小劇場が割拠しているソウルの大学路（テハンノ）を初めて訪れた時ほどの衝撃は無かった。しかし、「表現の自由を求めて戦う演劇」という創作の物差しに、私はふれることができて、とても刺激を受けた。同時に、現代演劇が発展途上であるからこそその作り手たちの熱気を感じた。今回のレポートから、そういったタイの作り手たちの熱が、日本の小劇場の演劇人に伝わり、新たなコラボレーションのきっかけになればと切に願う。

2. 日本人資産家タイ代理出産事件の取材

日本人資産家タイ代理出産事件の取材は、まず、事件が発覚したコンドミニアムを調べることから始めた。タイの知人から、バンコクの英字新聞に一年前の事件のことが載っていたという情報を得て、その新聞を調べると、マンションの名前が載っており、簡単に場所を検索することができた。私は、ニコン・セタン氏に、彼が住んでいるマンスリーマンションを紹介してもらい、そこに住んでいたのだが、私が住んでいるマンションから、件のコンドミニアムは、タクシーで10分ほどのところにあった。（右写真は、事件が発覚したコンドミニアムの中庭）



少しだけお洒落な外観と、日本車やドイツ車などが停まっている駐車場。高級感を感じるが、そこまで手が届かない感じではない。敷地内には、プールらしきものがあつたが、泳いでいる人影はなかった。このコンドミニアムは、オートロックになってて外からは入れず、一階玄関の受付の人はあまり英語が話せなかった。受付の人から、管理者の名刺をもらったが、結局、マンション内の取材はできなかった。

同様に、代理出産のクリニックやエージェントも訪ねたが、取材に応じてくれることはなかった。

少し、困っていた時に、バンコク在住の日本人の知り合いから、バンコクのNHK支局で働いてる方を紹介してもらうことができた。そのNHKの方とはすぐに会うことができ、事件が起こった時の話や、現在の状況などを伺うことができた。その中で、タイの警察に保護されている赤ちゃんたちが、どうなったかという話があり、政府の管理する、児童養護施設・孤児院のようなところで、面倒を見られている、ということを知った。事件の赤ちゃんたちがいる児童養護施設や孤児院でなくてもいいので、実際に、施設を見学に行きたいと思う気持ちが強くなり、四軒ほどの孤児院を見学する。



その内の一つが、バーンロムサイという、日本のNPOがやっている、孤児院だった。（右上の写真参照。）バーンロムサイにいる子どものほとんどが、HIVウイルスに母子感染している孤児たちという話を聞いて、衝撃を受けた。どこの孤児院でもプライバシーのこともあり、孤児たちへのインタビューはできなかった。しかし、少なくとも、表面上は普通の子どもたちと変わらない、元気に遊ぶ姿が印象的だった。

普通のタイ人が、例の代理出産事件について、どのような考え方をしているのか聞くために、知人の知人が教師をやっている日本語学校も訪ねた（右写真は、日本語学校のあるビル）。



外国人が、日本語学んでいる風景は私にはとても新鮮で、様々な発見があった。英語のGoldは、タイ語ならイエンだが、日本語は、寒いと冷たい。寒いと冷たいは何が違うのか？そんなこと考えたこともなかったのも、おもしろかった。

授業の終わりには、教師が、私にインタビューの時間をくれた、一般のタイ人（しかし、彼らは英語が喋れる人たちだが）に、代理出産について、どう思うか、聞いた。そして、多くの日本人がそう言うだろうと同じように、「不妊治療としては、アリだけど、親族間に限るべきで、まして、20人の子どもを求めるのは、おかしい」と言う。「私はしないけど、貧しい女性は、することもあろう。売春と同じように。」

代理母には、同情しないという、強い意見もあった。「彼女たちは、そうしないこともできるけど、それを選択している」という非難の意見だ。私は、「状況や環境が、彼女たちをそういう仕事を選ばざるを得ないように追い込んでいる」と反論したが、「いや、彼女たちは拒否することもできるのに、してない」と議論が平行線だった。

他に、取材目的ではなかったが、観光地のワットアルンや、シリラート病院の死体博物館を訪れて、最終的に、「グローバル・ベイビー・ファクトリー2」の中に、登場することになった。ワットアルンは、三島由紀夫の小説「暁の寺」の舞台になったお寺だが、今回、僕が見たタイのお寺の中でももっとも美しい寺だった。シリラート病院の死体博物館は、人体の全身のホルマリン漬け等が展示してある博物館なのだが、そこに並ぶホルマリン漬けの胎児たちの一群は、不気味さを通り越して、神聖な趣さえ感じさせた。

取材は基本的にはバンコクで行い、ナルモン・タマプルックサー（ゴップ）氏を訪ねた時には、チェンマイでも行った。見学した四軒の孤児院の内、二軒はチェンマイの孤児院である。バンコクでの移動は基本的には電車（BTSと地下鉄）とタクシーを使った。住所の数字だけはタイ語でタクシー伝えるられるように、覚えた。チェンマイでの移動は、ゴップが車を出してくれた。チェンマイへの往復の飛行機は現地で手配した。

3. タイの現代演劇についてのリサーチ 2015 について

タイの現代演劇についてのリサーチは、9組のタイの現代演劇のアーティスト・プロデューサーへインタビューを行った。一組毎にインタビューをまとめたものを、「タイ演劇のキーパーソン・劇場」として、別紙にて、添付する。以下、そのリストである。主要なタイの演劇人たちの個人史や信念をできるだけ取り上げようと意図した。全編読んでいただければ、バンコクの今の演劇状況が浮かび上がってくると思う。

番外編の10は、インタビューではなく、とある学会での儀式的パフォーマンスの観劇記録である。このイベントでは、東南アジアの様々な儀式的パフォーマンスを見ることができたのだが、とりわけインドネシアのパフォーマンスに、私は刺激を受けた。

1. プラディット・プラサートン (Pradit Prasartthong) 氏
2. ナルモン・タマブルクサー (Narumol Thammapruxsa) 氏
3. トンロー・アートスペース (Thong Lor Art Space)
4. クレッシェント・ムーン (Crescent Moon theatre)
5. Bフロア (B-floor)
6. ニコン・セタン (Nikorn Sae Tang) 氏
7. デモクレイジー・スタジオ (Democracy Studio)
8. ベイビー・マイム (Baby Mime)
9. クリエイティブ・インダストリーズ (Creative Industries)
10. 番外編「東南アジア・米文化の精霊的な面からの考察」を見て

4. フェローシップ活動を終えて

「プロジェクトに関する今後の予定や展望 等」を必ず含めてください。

フェローシップでの取材を経て、「グローバル・ベイビー・ファクトリー2」は、2015年の6月6日に国際交流基金のホールでリーディング上演を、8月8日~13日に調布市せんがわ劇場で本公演を行った。

Part1より代理出産というテーマに踏み込んでいた、という意見もあれば、中盤が長すぎる等の意見もあった。全体的には、アンケートの自由記述に書き込まれた分量が、これまでの公演よりも多く、観客に何かしらの感動を与えられた公演になったと思っている。今後は、ゲイのカップルに焦点を絞り込んだ、part2.5や、代理出産で産まれてきた子どもたちをテーマにしたpart3を創っていきたいと考えている。

タイの演劇人たちとのコラボレーションの方は、タイの戯曲を紹介する、リーディング公演のプロジェクト等をやっていきたいと考えている。



写真：「グローバル・ベイビー・ファクトリー2」の舞台写真